

Personality characteristics, competitive motivation and psychological competitive ability of college equestrian competitors.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/29364

大学馬術競技選手における性格特性，競技意欲，及び心理的競技能力

吉村 喜信¹⁾ 出村 慎一²⁾ 山次 俊介³⁾
佐藤 進⁴⁾ 小林 秀紹³⁾

Personality characteristics, competitive motivation and psychological competitive ability of college equestrian competitors.

Yoshinobu YOSHIMURA ¹ Shinichi DEMURA ² Shunsuke YAMAJI ³
Susumu SATO ⁴ Hidetsugu KOBAYASHI ³

Abstract

The purpose of this study was to examine the characteristics of personality, competitive motivation, and psychological competitive ability in college equestrian competitors. Four types of questionnaires were administered to 84 subjects, 55 male and 29 female, the mean age was 20.4 years. The four questionnaires were: The Yatabe-Guilford personality test, Cattell's Anxiety Scale, Taikyo Sports Motivation Inventory, and the Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability 2.

The major findings may be summarized as follows:

- 1) Equestrian competitors show to emotionally unstable (inferiority feeling, nervousness, social unsuitability with a nervous lack of objectivity), have an anxious tendency (defective integration, ego weakness, frustration tension), and have a superior adaptability concerning characteristics of personality as compared with general people.
- 2) The equestrian competitors have lower athletic achievement motivation and higher competitive anxiety as compared with general competitors, and they tend to attach no importance to equestrian competition in daily life.
- 3) Female competitors were superior in psychological competitive ability to male competitors.
- 4) Male competitors were inferior in psychological competitive ability to general competitors. Female competitors were inferior in competitive motivation to general competitors, but they were superior in self-confidence and ability of strategy.
- 5) According to results obtained in this study, it is considered that equestrian competitors tend to lose themselves and fall into stage fright during competition, and therefore they need to strengthen mental power.

1) 福井工業大学
2) 金沢大学教育学部
3) 福井工業高等専門学校
4) 金沢工業大学

1. *Fukui University of Technology*
2. *Kanazawa University, Faculty Education*
3. *Fukui National College of Technology*
4. *Kanazawa Institute of Technology*

I. 緒 言

馬術競技は、与えられた運動課題に対して、馬を操作しながら、全ての運動課題の順序を記憶しつつ、歩調、推進気勢、従順、騎手の姿勢、騎坐及び扶助の操作などに細心の注意を払い演技を遂行し、そのパフォーマンスを審査員によって評価される競技である。したがって、選手は演技中の過失に対して、非常に神経質になる傾向がある。つまり、馬術競技では、他の選手や相手チームと競い合い、闘志や勝利意欲を前面に押し出す競技スポーツとは異なり、競技場面における各種心理的プレッシャーを克服し、自己の能力の最大発揮が必要とされる²²⁾。動機づけの最適水準の点からいえば、馬術競技は、課題に対する正確さや鋭い知覚的判断に基づく細かい運動の調節が要求され、アーチェリー競技、弓道、射撃などのT型競技(Target)のように比較的低い動機づけ水準において高いパフォーマンスが期待できる競技である^{9, 17, 21)}。競技スポーツにおいて心理的要因がピークパフォーマンスの重要な要因の一つであることは、多くの研究者によって指摘されている^{3, 4, 7, 9, 12, 21, 23)}。パーソナリティや不安傾向などの性格特性は競技場面における「あがり」に関係することが明らかにされており^{7, 9)}、また、さまざまな競技において、一流競技選手は一般競技選手に比べ、競技意欲、心理的競技能力が高いことが報告されている^{10, 11, 12, 20, 23)}。馬術競技やアーチェリー競技などは、心理的要因が競技パフォーマンスにより直接的に関与し、心理・生理的プレッシャーによる、覚醒水準の変動によりパフォーマンスは大きく左右されると考えられる^{9, 15, 17, 21)}。しかし、馬術競技選手の心理的特性に関して、性格特性、競技時の心理状態、及び心理的競技能力など観点からは十分に検討されていない。本研究の目的は、大学馬術競技選手の性格特性、競技意欲、及び心理的競技能力を明らかにすることである。

表1. 標本の特性

性別	(人)	男	55
		女	29
競技レベル別(人)		全国大会出場	17
		地方大会出場	67
年齢	(yr)	20.4 ± 1.33	
競技経験年数	(yr)	1.4 ± 1.53	

注) 平均 ± 標準偏差

II. 方 法

1. 対象

調査対象者は、中部地区の大学馬術部に所属する学生84名(男子55名、女子29名)であった。表1は被験者の特性を示している。被験者のほとんどは大学に入学してから馬術競技を始めており、平均競技経験年数は1.4 ± 1.53年であった。馬術競技は環境的・経済的理由から、他の競技と比較して個人的に取り組むには、困難な競技である。大学に入学後、馬術競技に取り組む場合が多く、よって経験年数も少ないと考えられる。また、調査対象者のうち、全国大会出場経験者は17名、地方・地域大会出場経験者は67名であり、また男女の競技経験年数、及び大会出場レベルはほぼ同等であった。

2. 質問紙

1) 性格特性検査

性格特性を捉えるために、矢田部・ギルフォード性格検査(以下 Y-G 性格検査)、及びCAS不安診断検査(以下 CAS)を利用した。Y-G性格検査は、12の性格尺度得点(D:抑うつ性, C:回帰性傾向, I:劣等感, N:神経質, O:客観性の欠如, Co:協調性の欠如, Ag:愛想の悪さ, 攻撃性, G:一般的活動性, R:のんきさ, T:思考的外向, A:支配性, S:社会的外向)より6つの性格特性得点(情緒的不安定性, 社会的不適応性, 活動性, 衝動性, 非内省性, 主導性)を算出した(表2)。また、これらの尺度得点に基づいて、A, B, C, D, 及びEの5つの性格型に類型した。また、CASは、5つの不安傾向の

表 2. Y - G 性格検査の因子、下位尺度及びその特徴

No	因子	下位尺度	下位尺度の特徴
1.	情緒的不安定性	D: 抑うつ性	悲観的, 陰気
		C: 回帰	気が変わりやすい, 感情的
		I: 劣等感	主動的, 自信がない, 自己の過小評価
		N: 神経質	心配性, ノイローゼ気味
2.	社会的不適応	O: 客観的欠如	空想性, 過敏性
		Co: 協調性欠如	不満が多い, 不信感
3.	活動的	Ag: 愛想の悪さ	短気, 攻撃的
		G: 一般的活動性	活発さ
4.	衝動的	R: のんきさ	気軽さ, 刺激追求, 衝動的性質
		T: 思考的外向	思慮不足, 大雑把
5.	内省的でない	A: 支配性	支配性, 指導性
		S: 社会的外向	社交的
6.	主動的		

表 3. C. A. S 不安傾向診断検査の尺度及びその特徴

No	尺度	尺度の特徴
1.	Q ₃ ⁽⁻⁾	: 人格統御力の欠如, または自我感情の発育不全
2.	C ⁽⁻⁾	: 自我の弱さ
3.	L	: 疑い深さ, またはパラノイド型の不安定性
4.	O	: 罪悪感
5.	Q ₄	: 欲求不満による緊張, または衝動による緊迫状態

表 4. TSMI の因子、下位尺度及びその特徴

No	因子	下位尺度	下位尺度の特徴
1.	競技達成動機	(1) 目標への挑戦	目標や限界に積極的に挑戦する
		(2) 技術向上意欲	技能の向上を目指して積極的に努力する
		(3) 困難の克服	困難な場面にくじけず克服する
		(4) 練習意欲	練習が好きで, 意欲的に取り組む
2.	競技不安	(5) 失敗不安	試合で負ける, 失敗することを恐れる
		(6) 緊張性不安	試合場面で情緒的緊張が高まる
		(7) 情緒安定性	試合場面で落ち着いて冷静に判断できる
3.	自己統制能力	(8) 精神的強靱さ	不利な場面に精神的強さを発揮する
		(9) 闘志	試合場面で闘志を発揮する
4.	積極的思考	(10) 知的興味	競技に関する情報に関心に向ける
		(11) 競技価値観	競技が自分にとって価値があると考え
		(12) 計画性	試合の仕方や練習に計画性をもって臨む
5.	コーチとの人間関係	(13) 努力への因果帰属	試合での成功は自分の努力の結果と考える
		(14) コーチ受容	コーチに対する信頼感
6.	日常生活習慣	(15) 対コーチ不適応	コーチとの人間関係がよくないと考える
		(16) 不節制	競技を中心とした生活ができる
7.	勝利への志向性	(17) 勝利志向性	競技では勝つことに意味があると考え

表 5. DIPCA. 2の因子, 下位尺度及びその特徴

No	因子	下位尺度	下位尺度の特徴	項目	
1	競技意欲	(1) 忍耐力 (2) 闘争心 (3) 自己実現意欲 (4) 勝利意欲	我慢強さ, 粘り強さ, 苦痛に耐える 大試合や大事な試合での闘志 可能性への挑戦, 主体性, 自主性 勝ちたい気持ち, 勝利重視	各下位尺度 4項目 計 48項目	
2	精神の安定・集中	(5) 自己コントロール (6) リラックス (7) 集中力	気持ちの切り替え, いつものプレイ 不安・緊張のない精神的なリラックス 落ち着き, 冷静さ, 注意の集中		
3	自信	(8) 自信 (9) 決断力	能力・実力発揮・目標構成への自信 思いきり, すばやい決断		
4	作戦能力	(10) 予測力 (11) 判断力	作戦中, 作戦の切りかえ 的確な判断, 冷静な判断		
5	協調性	(12) 協調性	チームワーク, 団結心, 協力		
Lie Scale			検査結果の信頼性		4項目

特性 (Q3 (-):自我統御力の欠如, C(-):自我の弱さ, L:疑い深さ, O:罪悪感, Q4:衝動による緊迫) について各項目得点及び総得点を算出した (表 3)。

2) 競技意欲検査

競技意欲を捉えるために, 体協競技意欲テスト (以下 TSMI) を利用し, 競技に対する意欲を示す 7つの因子 (競技達成動機, 競技不安, 自己統制能力, 積極的思考, コーチとの人間関係, 日常生活習慣, 勝利への志向性) と 17の下位尺度 (目標への挑戦, 技術向上意欲, 困難の克服, 練習意欲, 失敗不安, 緊張性不安, 情緒安定性, 精神的強靭さ, 闘志, 知的興味, 競技価値観, 計画性, 努力への因果帰属, コーチ受容, 対コーチ不適応, 不節制, 勝利志向性) について各因子及び各尺度得点を算出した (表 4)。

3) 心理的競技能力検査

競技中の精神力 (心理的競技能力) を捉えるために, 徳永ら¹⁴⁾ が開発したスポーツ選手の心理的競技能力診断検査 (以下 DIPCA. 2) を利用した (表 5)。DIPCA. 2は 5つの因子 (競技意欲, 精神の安定・集中, 自信, 作戦能力, 協調性) と 12の下位尺度 (忍耐力, 闘争心, 自己実現, 勝利志向性, 自己コントロール, リラックス, 集中力, 自信, 決断力, 予測力, 判断力, 協調性) から構成されており, これらの各

因子及び尺度の粗点を算出した (表 5)。

3. 解析方法

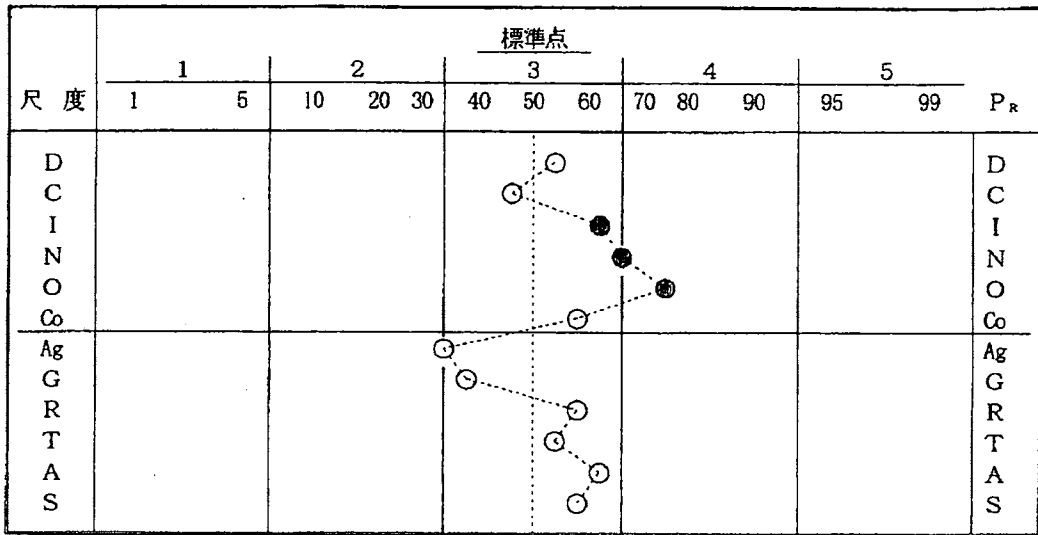
解析は, Y-G 性格検査, CAS, TSMI 及び DIPCA. 2における各個人プロフィールを作成した。DIPCA. 2については下位尺度得点に性差が報告されていることから, 男女別に得点を算出し, 平均値の差の検定より性差を検討した。また, 各テストの基礎統計値を算出し, Y-G 性格検査, CAS は一般成人, 及び TSMI, DIPCA. 2 は一般運動選手における標準値と平均値の差の検定を行った。なお, 有意水準は 5% とした。

III. 結 果

1. 大学馬術競技選手の性格特性及び不安傾向

Y-G 性格検査による 12の性格尺度得点及び 6つの性格特性得点の平均値, 標準偏差を算出した。図 1 はそれぞれの平均プロフィールを一般成人の得点¹⁰⁾ とともに示している。馬術競技選手の性格尺度得点は劣等感, 神経質, 及び客観性の欠如において有意に高い値を示した。また, 6つの性格特性に分類して比較すると, 情緒的不安定性及び主導性において高い傾向を示した。

次に, 各個人の性格尺度得点のプロフィールを A (average) 型, B (blast) 型, C (calm) 型, D (director) 型, E (eccentric) 型, 及びいずれにも属さない型に分類した結果, それぞれ, 19.0%,



注) D:抑うつ性, C:回帰性, I:劣等感, N:神経質, O:客観性欠如, Co: 協調性欠如, Ag: 愛想の悪さ, G:一般的活動性, R:のんかさ, T:思考的外向, A:支配性, S:社会的外向, Pr :パーセンタイル順位
 ◎: 馬術競技選手の得点が一般成人(辻岡:1979)より有意に高いことを示す。

図1. 大学馬術競技選手のY-G性格プロフィール及び一般成人との比較

表6. Y-G 性格検査における性格類型

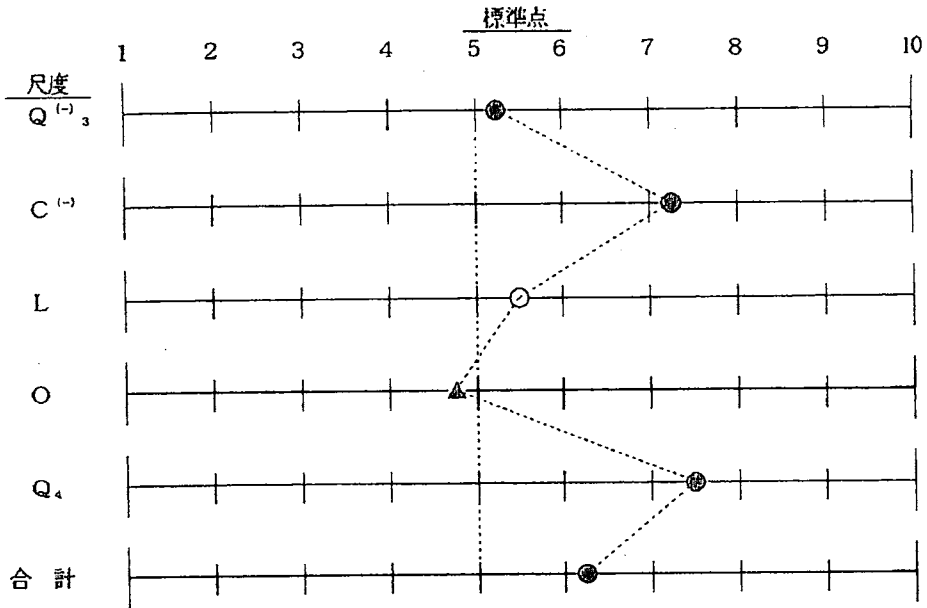
	A 型	B 型	C 型	D 型	E 型	その他
典型	1	8	3	4	7	2
準典型	14	8	3	16	7	
混合型	1	3	4	2	1	
合計 (%)	16 (19.0)	19 (22.6)	10 (11.9)	22 (26.2)	15 (17.9)	2 (2.4)

注) A:Average 型, B:Blast 型, C:Calm 型, D:Director 型, E:Eccentric 型.
 その他:いずれにも属さない型

22.6%, 11.9%, 26.2%, 17.9%, 及び2.4%の割合を示し, B 型及び D 型が比較的多い傾向にあった(表6参照). 本研究の馬術競技選手は全体の半数近くが B 型及び D 型の性格特性を示した.

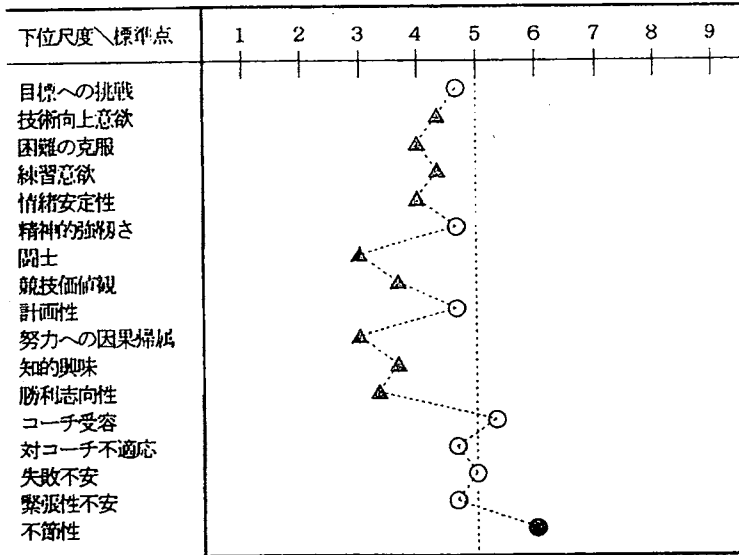
CAS による5つの不安傾向得点及び総合得

点における全体の平均値, 標準偏差を算出した. 一般成人¹⁹⁾の標準値と比較した結果, 疑い深さを除く, 全ての不安傾向因子において有意差が認められ, 大学馬術競技選手が自我統御力の欠如, 自我の弱さ, 衝動による緊迫状態及び総合得点において有意に高い値を示し, 罪悪感に



Q⁽⁻⁾₁: 人格統御力の欠如, または自我感情の発育不全, C⁽⁻⁾: 自我の弱さ,
 L: 疑い深さ, またはパラノイド型の不安定性 ○: 罪悪感,
 Q₄: 欲求不満による緊張, または衝動による緊迫状態
 ●: 馬術競技選手の得点が一般成人(対馬:1960)より有意に高いことを示す.
 ▲: 同様に有意に低いことを示す.

図2. 大学馬術競技選手におけるCASプロフィール及び一般成人との比較



注) ●: 馬術競技選手の得点が一般スポーツ選手(松田:1981)より有意に高いことを示す.
 ▲: 同様に有意に低いことを示す.

図3. 大学馬術競技選手におけるTSMIプロフィール及び一般スポーツ競技選手との比較

男子

女子

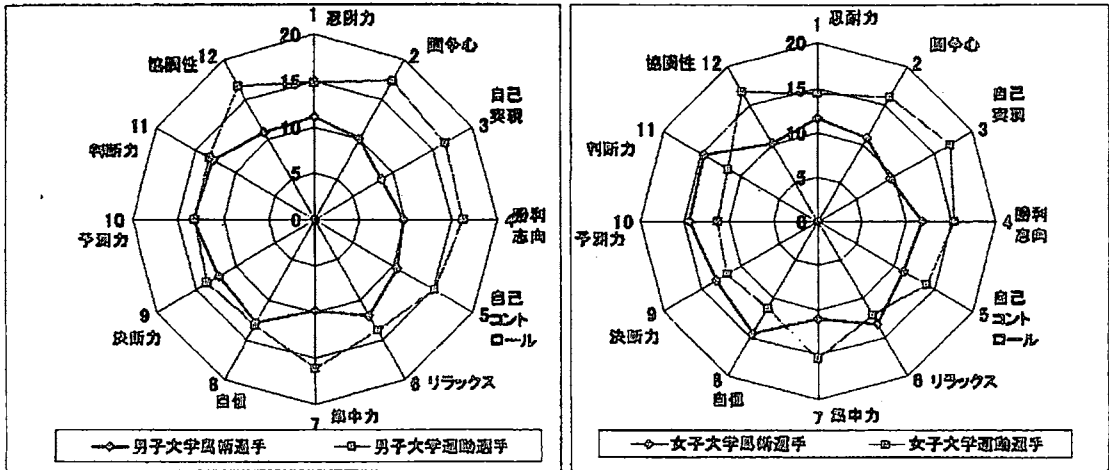


図4. DIPC A 2のプロフィール (標準得点), 一般運動選手との比較

において有意に低い値を示した (図2)。つまり、馬術選手は自我統御力、及び欲求不満による緊張を統制する能力が欠如する傾向を示し、情緒的に不安定な傾向を示した。また、衝動による緊張感が高く神経質な一方で、罪悪感が低いことから順応性に優れる傾向を示した。

2. 馬術競技選手の競技意欲特性

TSMI による17の下位尺度得点を個人別に求め、一般競技選手の標準値⁶⁾と比較した結果、馬術選手が技術向上意欲、困難の克服、練習意欲、情緒安定性、闘志、競技価値観、努力への因果帰属、知的興味、及び勝利志向性において有意に低い値を示し、不節制において有意に高い値を示した (図3)。

3. 馬術競技選手の心理的競技能力

馬術選手において DIPC A 2得点の性差を検討した結果、全体的に女子が男子より高い傾向を示した。下位尺度において、勝利意欲、自信、及び判断力において女子が男子より有意に高い値を示し、作戦能力因子において有意な性差が認められた。馬術競技選手における心理的競技

能力の性差において、一般運動選手との比較は男女別に行った。

DIPC A 2による各下位尺度得点を算出し、一般運動選手¹⁶⁾の値と比較した (図4)。男子では、一般運動選手に比べ、全体的に低い値を示し、下位尺度では自信、予測力、及び判断力を除く全ての尺度において有意に低い値を示した。因子では、競技意欲、精神の安定、及び協調性において有意に低い値を示した。一方、女子では、馬術競技選手の得点は一般運動選手と比較して、自信、及び作戦能力において有意に高い値を示し、競技意欲、精神の安定・集中、及び協調性において有意に低い値を示した。下位尺度においてリラックスを除く全ての尺度に有意差が認められた (図4)。

IV. 考 察

馬術競技は複雑で困難な課題を正確に且つ素早くクリアしていかなければならないため、他の競技スポーツに比べ、心理的な要因が競技パフォーマンスに直接的に関与する競技と考えられる。しかし、これまで、馬術競技選手の心理特性に関する報告はほとんどなされていな

競技選手の心理特性を明らかにすることを目的とした。

大学馬術競技選手の性格特性を捉えるために Y-G 性格検査及び CAS を利用した。Y-G 性格検査及び CAS はスポーツ分野では競技スポーツの適性を把握するために頻繁に用いられている²⁾。また、これらの性格検査で捉えられる性格特性は競技スポーツの経験によって変化することが明らかにされている^{2,3)}。花田ら²⁾は、大学運動選手と一般学生の性格特性を比較し、運動選手は、劣等感が低く、のんきで活動的であり支配性が強く、社会的外向でやや衝動的な面のある性格特性を有すると報告している。また、競技経験が長くなると競技選手では攻撃的な性格が助長されると述べている²⁾。これらは、本研究で示した大学馬術競技選手の性格特性と異なる傾向であり、相手を打ち負かそうとする競技意欲よりも、冷静さ、集中力を高め自己のパフォーマンスを最大限に発揮しようとする競技特性が影響していることが考えられる。上述したように、馬術競技の競技特性は他の競技スポーツとは異なる傾向を持つため、花田らが報告した性格特性と一致しないことも考えられる。

豊田¹⁷⁾は集中力と性格特性の関連を検討し、集中力の高い選手は、活動的、支配的、社会的外向的で劣等感が強いとし、6つの性格特性に分類すると活動性や主導性が高いと報告している。これは、馬術競技選手が有する、劣等感、及び主導性が強い性格特性と一致していた。丹羽ら^{8,9)}は不安傾向の強い人ほど、競技時にあがりやすい傾向にあることを報告しており、特にその傾向は個人競技において強いと述べている。また、花田ら²⁾、及び徳永ら¹²⁾は競技選手に多くみられる類型は A 型、B 型及び D 型であると報告している。B 型は、情緒不安定、社会的不適応、活動的、積極的、外向的、また D 型は、情緒的安定、社会的には適応または平均的、活動的、積極的、外向的という特徴がある。この2つの類型に共通する特徴は、活動的、積極的、外向的であり、競技選手として好ましい性格特性であるといえる。

B 型及び E 型に関して、豊田¹⁷⁾は「あが

り」と性格特性の関連を検討し、Y-G 性格検査の B 型及び E 型のものがあがりやすい傾向にあると述べている。本研究の B 型及び E 型の選手は全体の 4 割程度であり、この競技選手は情緒不安定性、社会不適応性などの性格特性を示す傾向にあった。さらに、馬術競技選手の性格特性として、Y-G 性格検査における劣等感、神経質、及び CAS における人格統御能力の欠如、自我の弱さが強い傾向が認められ、周囲の評価や社会的基準のようなストレスに対して過剰に反応する性格特性が窺えた。このような性格特性は自己の行動に対する自信の不足、または欲求不満によって起こった緊張を統制し、現実にはふさわしい対処行動を十分に取れないことから、不安傾向に陥りやすいと推測され、競技パフォーマンスにマイナスに作用すると考えられる。日常生活及び競技生活におけるストレスに対して、適切な対処行動が不安傾向などの神経症群を軽減することから、今後、不安傾向や情緒不安定性が高いと判断される場合は適切な対処行動をとることを心がける必要があると考えられる。これらの性格特性は長い期間により備わったものと考えられるが、運動競技選手の場合、競技スポーツに取り組むことにより、一時的な不安定状態に陥ることもあると報告されている²⁰⁾。本研究の TSMI の競技意欲得点から情緒不安定な傾向が窺えられることから、馬術競技による緊張や不安が性格特性に影響していることも考えられる。今後、競技経験年数による性格特性の違いを検討し、これらの性格特性が競技を継続したことにより生じる、馬術競技選手特有のものかどうかをより詳細に明らかにする必要がある。

馬を操り課題を達成しなければならない馬術競技において、CAS で示した順応性に優れる傾向は望ましい特性であるといえる。しかし、丹羽⁸⁾は不安傾向を強く規定している性格特性として、思考的内向、抑うつ性、神経質傾向、及び主観的特性を挙げており、馬術競技選手の神経質、客観性の欠如傾向の強い性格特性が不安傾向を強めた要因の一つとして推測される。また、先行研究において、競技に対する意欲が

低いものほど、不安傾向が強いと報告されており、馬術競技選手の競技意欲が低いことと不安傾向が強いことの関連性が示唆された。不安は、比較的安定した個人特性としての不安（特性不安）と一時的で時間とともに変化する不安（状態不安）に大別される。CASによって捉えられる不安傾向は特性不安であり、先に述べた性格特性と同様に、これらの不安傾向が競技特性により変化したものであるかを明らかにする必要がある。

TSMIの結果より、自己の技能及び競技レベルの向上に対する意欲、及び競技場面での困難な状況を克服しようとする意欲等の競技達成動機は低い傾向がみられ、性格検査の結果と同様に情緒不安定で冷静な判断に欠ける傾向を示した。さらに、日常生活において馬術競技に対する考え方を捉える尺度に関して、知的興味及び勝利志向性の得点が低く、不節制の得点が高かった。競技意欲において一般の運動競技選手に比べ、競技達成動機が低く、自己の馬術競技レベルの向上をあまり重視しない傾向、及び日常生活において競技を中心として行動しない傾向が示された。

先行研究では心理的競技能力の性差ついて、協調性を除く全ての因子において男子が女子より高く、また、忍耐力、自己実現意欲及び協調性を除く全ての下位尺度において男子が女子より高いと報告している^{14, 15, 16)}。本研究では女子が男子より高い傾向を示し、先行研究とは異なっていた。DIPCA-2得点について、一般運動選手と馬術選手を男女別に比較した結果、馬術競技選手が、男女ともに競技意欲、精神の安定・集中、及び協調性に欠如する傾向を示した。先行研究^{15, 16)}において、団体競技種目では競技成績と集中力、及び協調性に、一方、個人競技種目では競技成績と競技意欲、精神の安定・集中、及び自信に高い関係があることが報告されている。馬術競技選手の心理的競技能力は、一般大学運動選手に比べ、自信、作戦能力が比較的高く、特に女子では自信、作戦能力が高い傾向を示した。これは個人競技種目と異なった傾向であった。馬術競技が、個人競技種目のなか

でもアーチェリーや弓道のように低い動機づけ水準で高いパフォーマンスが期待できるといった競技特性を有するためであると推測される。馬術競技は、相手を打ち負かそうとする他の競技スポーツとは異なり、馬の歩調、推進気勢などに注意しながら、冷静に一つ一つの課題を達成するという競技特性から、忍耐力、闘争心、勝利意欲が低いと推測される。また、選手は、馬のコンディションや馬との信頼関係が優先されるため、一般的な競技スポーツに比べ、チームの仲間やパートナーとの協調性が低いと推測される。個人競技スポーツは、その試合場面では自分との戦いであるため協調性が低くとも競技パフォーマンスへの影響は少ないと考えられる。しかし、本研究の馬術競技選手のように不安傾向、情緒不安定性の高いものは、積極的にチームの仲間とのコミュニケーションを図る必要があると考えられる。馬術競技の特性を考慮すると、精神の安定・集中、自信、作戦能力などが、より重要な心理的要因であると考えられる。男子馬術選手はいずれの心理的競技能力も低く、一方、女子馬術選手は自信、作戦能力において高く、馬術選手として望ましい傾向を示したが、自己のコントロール、集中力が低かった。性格特性において情緒不安定性、及び高い不安傾向を示すことが、自己のコントロールや集中力に影響を及ぼしていると推測される。

今後、さらに馬術競技選手の心理特性調査を進め、競技経験年数、競技レベルの違いと心理特性との関係を検討する必要があると考えられる。

V. まとめ

Y-G 性格検査、CAS、TSMI 及び DIPCA-2 を用いて大学馬術競技選手における性格特性、不安傾向、競技意欲特性、及び心理的競技能力を検討した。大学馬術競技選手は、一般的に経験年数が浅いと推測され、馬術競技選手の適性を未だ十分に備えていないと推測される。したがって、大学馬術競技選手において、競技経験を積み、馬術競技に精通するとともに競技に対する心理面の強化の必要性が示唆された。

本研究で得られた知見は以下のように要約される。

- 1) 大学馬術選手は、一般成人に比べて、情緒不安定性(劣等感, 神経質), 社会的不適応(客観性の欠如)及び不安傾向(人格統御能力の欠如, 自我の弱さ, 欲求不満による緊張)の性格特性を有する傾向が認められた。また、順応性は優れる傾向を示した。
- 2) 馬術選手は、一般運動選手に比べて、競技達成動機が低く、競技不安傾向が高く、そして、日常生活において馬術競技を重要視しない傾向が窺えた。
- 3) 女子馬術選手の心理的競技能力は男子馬術選手より優れていた。
- 4) 男子馬術選手の心理的競技能力は一般運動選手より劣る傾向にあった。女子馬術選手は、競技意欲に劣るが、自信、及び作戦能力に優れる傾向にあった。
- 5) 馬術競技選手は情緒不安定性、及び不安傾向から競技中に自分を見失い、あがりやすい傾向が窺え、また、競技意欲、及び心理的競技能力が低いことから心理面を強化する必要性が示唆された。

文 献

- 1) Auvergne, S. (1983) Motivation and causal attribution for high and low achieving athletes. , Int. J. Sports Psychology. 14, 85-91.
- 2) 花田敬一 (1978) ポーツ適性と素質—精神的特性からみた素質—. 体育の科学 97-101.
- 3) 半田洋平・高田正義 (1997) ハンドボール選手の心理的競技能力. 愛知学院大学教養部紀要 44 (3):25-31.
- 4) 日野和明 (1992) 空手道選手の心理的競技能力に関する研究. 西南学院大学児童教育学論集 18 (2):91-103.
- 5) 小村渡岐磨・今村義正 (1980) わが国におけるトップランナーの性格特性の一考察. スポーツ心理学研究 7(1):16-22.
- 6) 松田岩男・猪俣公宏・落合 優・加賀秀夫・下山剛・杉原 隆・藤田 厚 (1982) スポーツ選手の心理的適性に関する研究—第3報—. 昭和56年度 日本体育協会スポーツ科学研究報告IV.
- 7) Mogan, W. P., Johnson, R. W. (1997) Personality characteristics of successful and unsuccessful oarsmen. International Journal of Sports Psychology. 9:119-133.
- 8) 丹羽劭昭 (1980) 大学運動部員の不安傾向と心理的諸特性との関係. スポーツ心理学研究 7(1):8-14.
- 9) 丹羽劭昭・高柳茂美 (1988) 「あがり」の心理・生理的徴候の2次元モデルの検討. スポーツ心理学研究 15:6-15.
- 10) 岡本昌也・高津浩彰・高田正茂・寺田泰人 (1996) 社会人ラクビー選手の心理的競技能力について—競技成績・ポジションによる比較—愛知工業大学研究報告 31A:23-26.
- 11) 杉原 隆 (1981) 女子スポーツ選手の経験年数からみた競技動機の特徴. 昭和57年度日本体育協会スポーツ医科学研究報告 No.1:12-20.
- 12) 徳永幹雄・橋本公雄 (1975) 運動と経験と発育発達に関する研究—高校運動選手について—体育学研究 20:100-109.
- 13) 徳永幹雄・橋本公雄・高柳茂美 (1989) スポーツ選手の心理的競技能力に関する研究. スポーツ心理学研究 16:92-94.
- 14) 徳永幹雄・橋本公雄 (1989) スポーツ選手の心理的競技能力の診断とトレーニングに関する研究. デサントスポーツ科学 8:137-148.
- 15) 徳永幹雄・金崎良三・多々納秀雄・橋本公雄・高柳茂美 (1991) スポーツ選手に対する心理的競技能力診断検査の開発. デサントスポーツ科学 12:178-190.
- 16) 徳永幹雄・橋本公雄 (1993) 九軌式心理的競技能力診断検査 (DIPCA. 2)-手引き-. TOYO PHYSICAL.
- 17) 豊田一成 (1986) アーチェリー選手の心理的特性に関する研究. スポーツ心理学研究 13(1):24-31.
- 18) 辻岡美延 (1979) 新性格検査法— Y-G 性格検査実施・応用・研究手引—. 日本・心理テスト研究所 248-271.
- 19) 対馬 忠・辻岡美延・対馬ゆきこ (1985) C. A. S 不安診断解説書 (改訂版). 東京心理株式会社 (東京) 1-20.
- 20) 筒井清次郎 (1992) 競技意欲・競技不安と原付帰属の関係. スポーツ心理学研究 19(1):26-31.
- 21) 吉村 功・中込四郎 (1986) スポーツにおける Peak Performance の心理的構成要因. スポーツ心理学研究 13:109-113.
- 22) 吉村喜信・出村慎一・長澤吉則 (1991) 馬術競技選手の身体的・心理的特性. 北陸体育学会紀要 27:95-104.
- 23) 吉沢洋二・岡沢祥訓・猪俣公宏 (1983) ホッケーの女子トッププレイヤーの心理的適性について. Nagoya J. Health Fitness, Sports. 6(1):113-120.